

弘法大師御一代記圖繪
全

特36

871

016899-000-0

特36-871

弘法大師御一代記圖繪

白蓮洞里仙居士/著

M24.8

ABE-0117



特36

871

弘法大師御代記圖繪

全

目次

- 一 大師御降誕の事 并 夜啼の事
- 一 神童と称する事
- 一 御夢想の事 并 誓願捨身の事
- 一 御上京の事 附 石淵寺御入室の事
- 一 剃髪受戒の事 并 大竜寺の事
- 一 室戸寄の事 附 桂谷降魔の事
- 一 金剛頂寺御建立の事
- 一 久米東塔より大日経と得る事
- 一 大師入唐の事 并 着岸の事

- 一 大師御入洛の事
- 一 五筆和尚勅号の事 并 鹿谷及流水
- 一 珍賀相傳と妨る事 并 守教護法
- 一 惠果和尚御入滅の事
- 一 御故朝の事 并 三杵と投る事
- 一 御上京の事 并 唐土清光寺経藏
の火災を救いし事
- 一 太子の御廟へ御参籠の事
- 一 清凉殿より宗義と説く事
- 一 槇尾山紫手水の事
- 一 高雄山灌頂の事 并 川越に額を
つけた事



みちより御両親ハ云におもはす一門の人々ハこの奇瑞
 と見てふく不可思議の事とふしいつきも目出度
 けりと祝し多る且この見子の御日常人になりて
 けごうく坐すときバ御霊夢と云うの奇瑞と
 云いこの御相見といひ常人にけり必佛陀の化
 身ふると各尊いふやいふ然るにこの見子
 御出生りしや夜々泣きさびゆ日と夜とを
 止めてバ父母こきとられいひしおれ支那
 の僧法進大僧都來朝しけり屏風が浦に
 宿する鄰家に赤子の声と終夜仏頂陀羅尼を誦す僧
 都中にて之をいひききき巴主人申するハこのころ鄰
 家に奇相の男子とされいひきき巴主人の泣声とをい



僧都ふしに之に翌旦佐伯氏の家を訪い小見と見父母
 につきて曰く此見凡人にけり後必るや大法といろりて天下
 國家の師とるべし大切に養育しとんとんごらに教訓し赤子
 と願照而三たび禮拜してそ帰らききる夫よりみん名と貴物といひ
 こと文敬愛しゆいたり

○御幼年神童の誉る事

御年三四歳のころより才智大人にまさり苟めりいやに遊とく土と
 つくわを仙像とつくり又木のけりてあつて堂塔とたてその佛像と禮拜し又
 行道のまゝとふしゆいきて世の小見と企しけりいよとけり其ころ問民苦使と
 て朝廷より國々へ勅使をつらき國主の良否と見きわめしゆ使のま
 にいり佐伯氏のいおとすねやに時より大師表にましくなるか勅使にハカ
 下馬して大師を拜してすねりや從者らより何人ともふれ者と斯く拜し



かつやとるのまきハ 勅使曰く奇あるれ仏法守護の
 四天王の眷属ともにも小児の前後につれ
 長い守りありこれ常人にけつと曰ひ多之を
 つけてはく神童と申し多る元三大師
 圓光大師も御幼少の時ハ居りよ所の空中よ
 り天蓋さかす諸仏のめん守るをらくも怠る
 りありと云ふりけき菩薩の權化ハ斯る奇
 特ハるべきあり

○御夢想の事 御奮發の事

誓願捨身の事

大師六歳の御時より夜ふく八葉の蓮花に坐し仏をうらと物
 かうし御夢とせんやとて髪をそり出家し志を潔くせんと思ふ



増ゆいさるて七才の御時いそに居るを忍びいてはるく高き峯に上りゆい
 十方と礼し三宝にちゆいと立ちゆに我今生の内に僧とあり徧く衆生とちいくの
 願心けりく邊鄙に生る界身にハれとと吾この望まふふ世尊釈迦牟尼
 如來のちりり形を現して我々に証明し又若今生にて時をらげハ我一命
 と諸仏にさげしもうふい生いて願望成就せんとふくちりゆいゆい峨々たる
 身と投ゆにふれたる哉忽天人けりたり空中て抱とめ本の所に
 ときよる時に奇雲谷より立ちりて世尊釈迦牟尼如來百宝の蓮花にのりゆい
 光明とくやうして現ゆ大師いよる限なく如來と伏すも是よりこの峯
 と我拜師山と号又出釈迦ヶ嶽と捨身ヶ岳とも名を讃州善通寺五岳の
 隨一正治西行法師の処と拜して

めぐりちせんこの契りぞもあもしに
 きいしき山のちりい見るにも
 西行法師



と咏じゆ昔雪山童子ハ半偈に身とすて善財童
 子ハ火坑に投じ常啼菩薩ハ般若のふみに生血とすれ
 う今大師ハ七歳のおん身と
 くる志と起しゆハまことにいじ
 くも又尊りたる

○御上京の事

さて又爰に伊豫親王の学士に阿刀宿根大足と云
 人なり大師御母方の伯父とて博学多才なるは
 人に從て文とちひひまに一とせり十と知り旦一とび耳
 にふきやみむごとく記憶しるに忠やふるふし大足主
 奇吳の思とふしいうにも人なりけいづらに辺土の塵に混
 せんすと惜と都へ上せると父母にすめりとも別きて惜て日を



のくハ大師父母に曰ふハ吾今交がさ人身を交けいひくき仏教にけい
 喜何にうとん凡生のものハ必滅すいかに別と惜むとも息たぬまはいつせん
 我朝夕父母の膝下にらうてつとむもこま返せの行とまを報恩の孝にけい
 今暫の別とあしとて未來永日のもがたと念きやふると曰ハ父母もや
 やく諾の延暦七年大師十五歳のと伯父大足主にけい都に上り
 けい直講味酒淨成と云天下無双の大儒の門に入り外典毛詩左傳
 尚書と習せよに御おえん類るるをバ淨成感に入て家の
 秘書とて残らげらけりぬ然きバその内に学業
 ごとく成りて今ハそや御心にくる雲もふく惠日の
 才自ら明ちりたり

○石洲僧正の室に入る事

外典功成てのち岩洲寺の僧正勤操のもとに入室とす





と咏じゆ昔雪山童子ハ半偈に身とすて善財童
 子ハ火坑に投じ常啼菩薩ハ般若のふに生血とくぬれ
 今大師ハ三つ七歳のあん身とて
 くる志しと起しゆハまことにいそじ
 くも又尊かりたる

○御上京の事

さて又爰に伊豫親王の学士に阿刀宿根大足と云
 人有り大師御母方の伯父とて博学多才なるは此の
 人に從て文とちひひまに一とびて十と知り旦一とび耳
 にふきゆふことごとく記憶しるに忠ゆふ事ふし大足主
 奇吳の思とふしいうにもさ人たりけいづらに辺土の塵に混
 せんすと惜と都へ上せると父母にすめりとも別きと惜て日を



のくハ大師父母に曰ふハ吾今交がさき人身と交けいづらさき仏教にけいづら
 喜何にうとん凡生のちもめハ必滅すいかに別と惜むとも息たぬまはいうたせん
 我朝夕父母の膝下にけりてつとるもこま返せの行とまこと報恩の孝にけいづら
 今誓の別とふしとて未來永日のちがたと念とゆふと曰ハ父母もや
 やく諾ゆの延暦七年大師十五歳のとに伯父大足主にけいづら都に上り
 ち直講味酒淨成と云天下無双の大儒の門に入り外典毛詩左傳
 尚書とて習せるとに御おんえん類るるまは淨成感にへて家の
 秘書とて残るけいづらけいづらぬ然まはまの内に学業
 ことごとく成りて今ハこや御心にくる雲もふく惠日の
 才自ら明ちりたり

○石淵僧正の室に入る事

外典功成てのち岩淵寺の僧正勤操のもとに入室とす



この僧正は三論宗の明匠として胸に八勝義皆空の理水と
 とへ舌に八不中道の利劍とありゆふ世にふ
 明星の化身と云ふるこの僧正大師とてみごと
 ろきゆひのまき凡人にけり必大権の化現する
 んと大に喜ひ五大虚空藏并に能満虚空藏
 の法と授くよ法は南都大安寺道慈律師入唐
 して之をさうり後善議にて人善議より勤操
 にて人善議と勤操とんと大師にて人善議の時大師
 いざ僧体あるまじきども常にこの法と持念しゆいなる又
 十九才のあん時靜瞽指故といふ三巻の書とありて俗教の
 つるふくも又いやと諸人より説き示しゆふといふ今世にてふる三教指故と
 いふ書是なり



○剃髮授戒の事 大龍寺のり

三論の法味日るべしてその奥旨を明めきき延暦十二年乙未年二十歳にて
 勤操和尚と師とし泉州槇尾寺において十戒七十二の威儀とさるる飾
 と下しゆの御名と空如と申するのち又教海とて御修行いよくすこ
 々々昼は本地の風光に獨結の觀と行いゆ夜は瑜伽の法水に三密の月をす
 ず法と練ておこりゆふべ二十才にて南都東大寺の戒壇に入て具足
 戒を授くよの時より御名と空海とて始め斗敷行脚の志とあり
 阿州大竜寺にいりてりてひさすり虚空藏の法と
 修しよふにたらしり悉地の相ちりて天より宝劍
 とひ來り瑜伽の壇上に立ちり今にふ寺に
 大師種々の奇瑞とありてゆふ法の法とよく
 修しゆ故あり今も此法を修すまは必し験ありと



ふん即大師の御行法を受つた故なり

○室戸岬の事

大師靈巖求聞持の法を修せんと閑寂幽遠の地と求めしに土州室戸岬と名く塵世とて人語のいなき文とふく絶岸風清くして類る止観の地と形なり此菴とむすびて住のあり南大洋にして法性無辺と示し随縁真如の浪とぬ日もふりきき

法性の室戸といてどくすあが

うのりるふりせぬ日とふき

と咏のふ然るに御修持坊んと夜々海中より毒竜

鬼形の異類りいまはんとすまのりもくんとすきと

と大師かゝもふとろきり一夜求聞持の神

咒と唱ふ天より明星下りていはの巾へとい



この海今にいろりて金色の光をのこす

と云又一日瑞雲とていき異香

四方に薫く虚空蔵がま現

のい光明と大師の頂にてし

のいばらちす求聞持の悉

地と得のいり減にむら

の化身とハ申るから斯るうきも△

るふと尊くも又恐こりる

○柱谷降魔の事

行法己に満めき東國徧参の志を起しゆの豆州柱谷にいろりゆこの地人跡なくと暫く錫と止ふにる菴已に天狗のすみろとるうたき天狗とも大に怒り種々



入り大師

海に向て神

咒と唱へ唾と吐

夕に忽ち光明を

かやき返りまきハ怪

物ハ之とさるき再い來

るふと魔事ふかくたね

さふく妨害とすをも大師のしも恐ろしく指を以て空中に大般若經をす
ゆふ事品にいり奇哉虚空に文字有りき光を放り多き天狗とも恐て八方
へけ失り大師大日如来の像を彫刻して本尊としゆ遠近の男女の奇瑞
とすていふ信をこしるとふんこの巷修善寺と名々て仏法繁昌の靈地と
ハるりたりたり

○金剛頂寺御建立の事

又土州へうりゆい衆生と度せん室戸より百丁ほどへてる濱辺に靈地有りこに
一字と建立せんとえりるさうふろくに日暮ききバいつきにて夜を明ええ活しうふ大なる
楠の本に洞穴有りこき了れ臥処と立より人音すゆ故に一夜の宿を乞ふハ中の人
音ハ天狗にて大にいう大師と罵りたり大師こきとえとまハし悪ハこの所に住居せバ
伽藍建立の妨りりと御目ととち火界の咒ととまハふりたる哉洞のぐるりや火
もえいてり天狗ともハ畑にもせぬ炎にやうきりてふさめ散々にけり去り大師又末



世に立戻り住りもやと自らすぐて周してそこに安置し悪ハと結界し伽藍を
建立し今金剛頂寺と名々又西寺とも云

○久米の東塔にて大日經を得りし事

大師一日仙前にて誓言ゆふん仙經要法と云むるに尚いさ疑り願くハ
三世の諸仏も不二の法と示し久米といり久米その夜の夢に化人有りハ
汝が志とらハきこ吾示現せり今幸に和州久米郡高市の道場東塔
毘盧那遮經に流布せげと云 有り是を汝が求むる不二の聖經と大師
みん夢みて大に喜ひゆい久米寺にいり東塔と又久米の柱にて
めり之を放て又久米ハ果て大日經と有り夫の御經ハ人皇四代
正天皇養老年中に三藏法師唐土より持りしけり時いら
ずしてこの柱にあり入るハ本來三地のちり之と開べしと曰いて故より今
之と思へ大師ハ即ち三地の菩薩なる疑ふしとてこの經といひきえ

にまたかの權化も解しるる所なり而して経日本にて名をふ知る人なきは辺地末世に生
 ると悔のいなる今ハ入唐して證智の知識に切んとて大小の神祇をも仏陀に祈請
 入唐の平安を希ひ自檀を以て薬師如來を作つゝ是仁和寺喜多院の本尊へ又
 般若心經百卷をうして宇佐八幡宮に納めいとくに海上つがらるるを祈りつゝ
 多ふとふん

○大師入唐着岸の事

延暦廿三年五月三日大師五十三歳の夏勅許を経て遣唐使正三位藤原加能卿と共
 に肥前松浦より船出りつゝいづも遣唐使の船ハ揚州蘇州の津へつゝべき風波おどや
 すつゝそのめ福州の津に着り福州の長ハこの海岸へ遣唐使の船がつく
 るがまればハこき高松のちとむきいつるにとんり番士をつらて動
 きた加能卿大に困り大師に曰ふにハ余再三書とせりせ
 とも一交も答へず和尚ハ文聖妙心試に一書とせりつゝと



大師乃書を送るハ州長その奇文麗筆凡人のす実の
 遣唐使之苦もあつるを恐りて是より種々をてふし
 大切に扱より是も大師の御徳へて福州長安都へ急使
 を以て奏聞りりきバ帝よりいづく贈物りり且つその旅館と
 つくらせいと丁寧にうやまひたり

○大師御入京 五筆和尚勅号の事

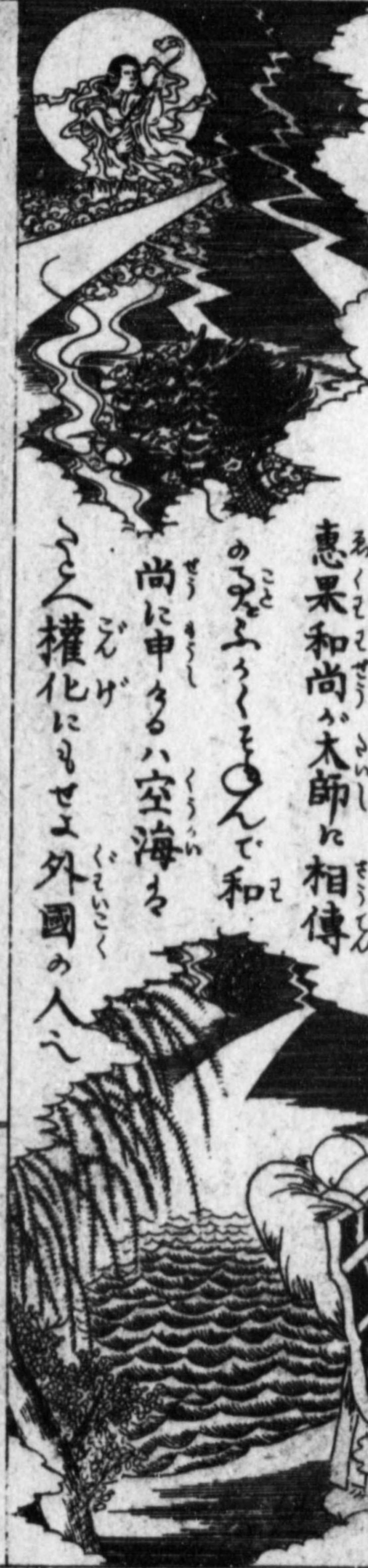
さて遣唐入京りべき旨の勅使來る其よとい善美と尽しり貞元廿年
 三月廿三日着京りり多きハ宗徳皇帝ハ大師にも御對顔りりせり西明寺に泊せりここに
 玄宗皇帝より三朝の國師不空三藏の弟子青竜寺惠果和尚大日如來の地無双の
 知識るんハ西明寺の僧志明等ともりて又之を以て和尙大師に向ひて汝をまらる
 久し何來るるの遅しと又諸弟子にこの僧ハ凡人にりり第三地のちつゝと告り六月上
 旬に胎藏の灌頂をうけ七月上に金剛界の灌頂をうけ八月に傳法阿耨耨の灌頂をうけつゝ



名と遍照金剛と改めりいふ、又五部真言其他兩部、秘方、昆盧舍那金剛頂をうらるるに傳得たり、実仏陀の化身とて舌をさきて稱嘆ふし、唐土宮中の壁に触書のすけるに、よりて大師にまゆべしと勅命あり、乃左右の手足と口にて流水の如くす、且まこと筆をすてすのこせる、処の壁にのりたるをとりけり、自ら文字とありぬ、ふその行力にあたり、多り帝ハ歡感のあり、五筆和尚と曰ふ、
 吳境にいり、うく譽を冠し、ゆる類すきある、
 此の故朝の後、いよく触書のすけるあり、
 嵯峨帝の勅命、朝廷処々のみ額もすせ、ききたる、
 ○虚空及流水に字とありきり、
 并珍賀大師の相傳を妨が後悔のり、
 守敏護法とつ



大師一日都ちく池の辺と道遙くあり、一人の童子いできて、貴僧ハ日本の五筆和尚と坐す、やいで虚空に文字とすてて見せ、久と云ふ、大師安きることす、ちりり、久ハ又流水にまゆべしと云、大師水面に養水の詩とす、久ハ文字乱まぐ、て流り童子笑ふ、く、我もまん、と龍の字とす、点とす、故に文字ちがれ、大師之をえて、何也、点と打つ、とぬ、やとぬ、久ハ点と打つ、と云、大師乃点と打つ、ハ忽文字まこと、龍と云、雲と云、こして飛去り、大師童子に向ひ、君ハ何人に坐す、久ハとぬ、久ハまん、と文珠がまん、とて天上より、ゆる、仏の、か、ん、も、大師の、徳と感應す、り、て、かく、研、ま、ゆ、い、
 玉堂寺の珍賀と云、惜り、
 惠果和尚が大師に相傳、
 の、ま、ふ、く、も、の、んで、和、
 尚に申たる、ハ空海、
 久ハ權化にもせ、外國の人



○御上京の事 唐土青龍寺の火災を救いたる事

大同二年の春大師上洛す久バ帝叡感すめあす法をすしめ宮中一
 全に皈依りりる一日大師のもとに勅使いさらせり
 いおがりのおろし大師西に向ひ三むいふと
 そきゆふに兩雲とるりて飛行る勅使
 その中をゆへに今唐土青龍寺り
 火災りりそきを救んぬと曰いなる
 果して唐土より去日青竜寺経
 藏火災りりし東より俄に暴雨
 あり来て之を救らりと報じ來きハ
 皆々感にんくるとるり

○太子の御廟へ御参籠。



弘仁元年大師河州科長山聖德太子の御廟に百日うる詣りるく九十六日の夜涼
 文に及びては廂のうちに大般若経と誦する声りり大師いふくかく微妙の
 声ハいあるは仏にやとりり多きは忍御廂の外に居きぬ我ハ救世観音の垂迹あり
 衆生と利せんかふあこの土に居りる母公ハ弥陀の化身ハ勢至の垂迹すもその三
 骨と一廂に納む諸の邪見とくだいて仏法の威徳を居ハし四十六町の伽藍と立ちり且諸経
 の要文とと示しゆに大師感涙を流しゆに之によつてりり第三發光地と證し幼
 いとあり

○清涼殿にて宗義を説く事

嵯峨天皇の勅詔にて諸宗の碩徳法相源三論道昌天台ノ清涼殿に召き大師所立の
 即身成佛の義を問難せりゆふ大師曰く即身成佛のころハ我ら如き肉身よりハ
 成仏するゆへに必多劫の苦行とらて之をば然るにる真言宗ハ肉身の不成
 佛するゆへに手印と結び口に真言と唱へ心に阿字の不生と観するゆへと菩提心

論及大証扱として答らまじうバいつきも閉口す時に帝曰くその証をえまじバ信いざしと
 けりまじバ大師乃大智券の印をむすび阿字不生の三摩地に入らバ忽ち金色の大日如来と成
 り満坐大とおろき帝曰くその諸山の碩徳はまふ大師の弟子とあり真言秘密の法
 と交ひたり

○鎮尾山紫手水の事

大師剃髪の昔と忍ゆい泉州鎮尾山に住しゆいにこの山水乏しき所にて手水のあるもさし
 つくまきバ檜の葉ととりて手とすりまきめ椿の木に投りけり我
 密法流布するふらバこの葉の木につきて共に栄んと曰ハ奇哉
 檜の葉椿に生付今の世でも栄たり世に之と紫手水と
 云又一時神呪を誦して平地を加持しゆバ忽ち清水こき
 いでり之と智恵水と云ふ

○高尾山灌頂の事 内 川越に額をすゆふ事



大空四年勅命によりて高尾山に妙のいりる後弘仁三年國家安泰の
 ため灌頂壇といらさ道俗に授ゆふに傳教大師受者の上首として之と交ひ
 その以金剛定寺の額を大師にすましとして勅使折柄五月雨と清滝川のあるり
 流りまじバ川のこまさより詔をてりゆ大師言下に筆ととりゆい川と
 すとすゆふに金剛定寺の四子すましに額面に影ぬ勅使の由と
 奏するハ大御感りせしれと云

○久米寺にて大日経を説きし事

大師昔久米寺にて大日経を得ゆい報恩のゆあり
 善無畏三藏の疏にゆて大日経を講ゆゆに
 諸神祇御聴聞すしゆと云その後大師
 東寺の門を以相の公羽にゆいゆいある
 人ぞとるゆゆハ我当所の鎮守八幡大をまらる。



跡垂る処ハ和尚必
 てもまきゆふ我又和尚の
 いる処ハ必何とせんとい契

約りり多し抑ふ八幡大菩薩の真言の高祖大日如來の垂迹と云又日本神仙記湯川の作に弘法大師ハ前世に聖徳太子と成りいと云全記に大師ハ天生にてハ勝曼夫人もろこしに親音の化身と云ふ彼と云いこきと云い大権の善巧ふるた故ちると知るべし

○閑院左大臣南円堂御建立の事

左大臣冬嗣公一日大師に家の繁栄といひ法を授けり大師入て山階寺の内に南円堂と建立り必一家をてんと曰ふ故に教の如く御建立しゆに恐くも春日明神祈きゆい今そそそそん北の藤とて永くいぬこきし一門いろくさ元代々王佐の官に任じゆり大師の力かきと云との後大師大峯御修行の時菩提心論并釈摩訶衍論の聖教を書写して靈岩に埋めしこれ大峯の秘所して今にいつて故実の先達ハ之と拜しと云

○龍泉寺の事 所々不思議の事



河州龍泉寺ハ伽藍の大寺なり故りて池水涸ると僧侶大に困ると大師す池に向て加持し多く龍王法味にんと旧池より多く水んくと涌いで寺号と今の如く改めると云

大師一日泉州大鳥郡の辺にてける老婆が一人子を狼に害せし泣きあそみと不便と思ふ加持し久ハ忽然としてよみかきり老婆のよろこびとつるとおあり且その村以後狼の害せざるす封じゆい

攝州住吉と牛の吠ると大師すゆひて汝か心と任すと曰ふ弟子やと存多き古債を謝ると曰ふく畜類吠るすむすかきハ実と奇と云ふべし

播州にいづりゆ時何家にと一泊とせ久ハ一人老婆よりこび諾ひ夕飯と盛る鉄鉢と捧て曰く昔行基をより宿へ來り時いつくの聖僧來ゆんその時よ鉢ときけよと有り鉢ハ純陀が釈尊へきけし器とわたり多る鉢今る向高野の御影堂に有り又老婆女のふに天地合の三字をきて与へゆ削字源シメテ削レドモ消エズ

○惠日寺の事 附 朽木橋の事

奥州會津の奥に靈地有り大師に伽藍と立惠日寺と名り丈六の薬師如來を安置し
附属寺院百余寺あるに密教を行す云又土州山中に千仞の谷お梯を架し阿耨
くち損じてるるか大師往來のあやと阿のきと朽る橋に向いて三歸の
咒をふりて之バ忽石橋に化して永く四きめ憂さうりたり

○高岳親王御受法の事

平城天皇の皇子御受法の事大師のもとへ詣りひるに
ふと大師の内行法と見え之バ菩薩のちういめく又人の
ハ皇子大まどろき禮拜くひいとこ又天王寺西門にて日
想觀と修し之バ大海天につるるちうすち頂に宝冠
冠せり又水想觀と入之バその処池と成不動使者の法と修
之バ四方より火燄いでるとあり



○高野へ月入り 加持力の事

大師真言相應の靈地と求むるとんかふ所々の山水と涉覽くふに和州宇智郡に白黒の犬
といきる異形の獵夫に阿の密法相應の地あり之教らんまといハ狩人曰くこれより南にいと
虚空に聳る靈峯有り昼夜瑞光有り山谷とて凡そ犬とくまの及を知バ和尚より
て又之とて阿ハ信ぬ大師との犬に於てり之バ今の天野明神の社の辺にいと明神
忽然として阿のいこまハ丹生津姫こまのふま子と老いて菩薩と迎へてこの地とてん
とすと曰いて大師と山顶に辱き樹上に光るおと見え之バ奇哉唐土
明州の津に投りて三結して自らとい來て大師の内にお返ぬもの
木の下に御菴室をつくり入定の地とて之を今この御影堂あり
弘仁七年天子御不豫の時大師七ヶ日秘法と修くゆいその
神水を奉りたまは御不例立に癒させゆ今九年三月大患疫流
行し死とすぬる者稀之大師加持く之バ病人とて回復すと云



○大塔建立の事 天皇及び諸山の高僧灌頂の事

弘仁十年 嵯峨天皇の御願として高野山に大塔を立中に大日如來 阿闍梨 等と安置し、その地中より長さ五尺の宝剣を有り出せり。此先仏の伽藍の巧なる明と云又平城 嵯峨 淳和の三帝はよく大師と御信仰の余り皇后皇子諸山の高祖として傳教大師と御公卿大夫庶民にゆるすて灌頂を交る者一万余人ある盛ると知るべし

○東寺と大師に賜る事 并 稻荷明神と御契約の事

桓武天皇南都より平安城へ遷都坐す時王城鎮護のため二ヶ所伽藍を建立し東寺西寺と名をゆいしが弘仁十四年正月勅して東寺と大師に賜ふ乃堂舎を増立して教王護國寺と名く又大師筑紫にゆりし時稻を荷する翁に何人あるやとゆふに余は都八条二階坊に在る紫守長者と云ふ稲荷明神の化身にして真言守護のため現るに於てゆいし 後此を伏見三ヶ峯に勧請し又八条二階坊の西旅所の地より又大師翁にゆいし日己の日なり故己の日を以て縁日とす



○雨乞の事 附 守敏僧都調伏の事 并 長湯御家中 疫病加持の事

淳和天皇天長元年天下大旱にして三月の雨を乞ふに農民は耕作の位を失ふ朝廷に憂はれ大師と命じて雨を祈りんとす 時西寺の住職守敏僧都奏して曰く予は年功戒行とも空海にすぎたは願の日大雨よきも落中うきりにて 祈りて大師と勅命有りて大師ハ神泉苑の池の辺にて七日 祈りて雨あり 又大師ふしぎに思ひ定めて又夕に守敏僧都がもろくの龍神を封じある故に併善女竜王を封じ洩さば之に祈りて金色神竜 壇上に居る怒り大雨を降す三日天下に雨を降し上一人より 万民にゆるすてよろこばる者ふし大師行徳感するに餘りなくして善女竜王をこの処に勧請しその神威を仰ぐ

ゆりこれより守敏僧都の怨恨ふよく調伏するに大師をよしくしめし御加持のゆいもればあも恙なくあり 年次納言良房卿のちん 家に疫病ありて寺に祈りて 高野山にこもり 念じし余奉向るに冥ありと云へり是し此節



良房卿の館に入りゆく病人ことごとく平癒
しゆくことまじきいよく信仰せりゆくゆひしといふ

○大内裏及善通寺の額に奇瑞ある事

應天門の額ハ勅命よりて大師の筆よりなるがごとく後又そのふに應の字一点欠く

多きハ大師下より筆をけて之を補ひたりする人おとろりするものあり

又皇嘉門の額をすひしが大學助紀百枝がその文字カ士の跋尾
せるがごとしとつにむきとて云夜に額の中よりカ士

券とてめて打すへらせしと云又朱雀の額をすひしに後
小野道風ハこの朱字米に似たりとてつに紙をすきしがる

夜に書に異形者大師の使と稱して道風が首をよそしと
又え多と本朝神仙傳にちり權化の筆痕をう精靈おそるて

又美福門の額もすひし久しく年経て墨痕
なりありと云んば寛弘四年正月大納言行成卿に勅し

ちいて元の字体を失は潤色を加へりや行成々大師の冥慮
と恐きゆひゆくつて諷誦をす東寺法頂院にて祈誓し大師

のいりてをきりそのま実ハ本朝文粹に云り
又讃州屏風浦
善通寺の額も大師の



御筆ありしが阿部晴明所用なりて云んば一向し夜に入りまは使鬼神に松明をもせこのちのあぞた多にふ
しきさるるふふふふふふの沐いづきりんそのちをそをりたるハ晴明その世をのりて人ハ梵天帝釈天
大師真筆の額を守護しアアセバだぞと
さけりしよし申せしふしきさるる

○後七日御修法の事 二間御修法の事

仁明天皇承和元年十一月奏状と云りて毎年正月一七日御修清勤いへきす奏
しゆバ恒例の例と定めらるぬこと宝祚万歳天下太平五穀成就のこの七日

の結願の日清涼殿に参仕し香水と玉体及百官にまをこんと後七日御修法と
云又二間御修法とハ宮中に於て毎月十八日観音供と修修と云んハ三國

傳來にして大師真言と日本にひろめゆり東寺の長者代々この秘法と勤修に
○仁王經法の事

天長二年四月二十日東寺に講堂と建立して仁王經一曼荼羅の聖衆とろり安置
ゆ乃ち五佛五菩薩五大忿怒梵天帝釈四天王等よりそれ密法ハ高幢の宝珠と

とてりその故ハ如意宝珠衆徳とそ多くて宝をかちきとる高幢の上におくまきハ全

天長二年四月二十日東寺に講堂と建立して仁王經一曼荼羅の聖衆とろり安置
ゆ乃ち五佛五菩薩五大忿怒梵天帝釈四天王等よりそれ密法ハ高幢の宝珠と
とてりその故ハ如意宝珠衆徳とそ多くて宝をかちきとる高幢の上におくまきハ全

その功をさるる心性に自ら万徳のきとも密教に入りさるる用破しがさし仮令
 七難國にあはるるも不動明王と本尊として仁王經を誦せば明王衆徳と願し諸
 天神威力をとりて防ぎ久しいる悪广強敵もいりてさるる面を向ふべ
 きと云べし

○御遺誡及御入定の事

淳和天皇天長九年八月大師奏聞して大僧都の官職を解り東寺を実惠
 僧正に高尾山と真濟にそのお住しゆい諸國の大寺を弟子にゆかり
 して高野山へ退隱しゆい供に真如親王真然等修す
 るいづきもあつと惜まざるはふし仁明天皇承和元年文
 諸大徳とまきゆい予の土の化縁つじ涅槃の期公來三月廿一日
 と云この日金剛定に入てさるる肉身とこの山に止り國家とすも
 滅後の弟子等勤行修学念るる勿き予入定すとも法身尚この世



住し明々の善悪の行為とすべし五十六億の後弥勒仏と
 とも再び世にいて結縁の衆生と度げべしと有りまはさるる
 おとろきうれいするものありやがてその期さるるゆきバ仏陀來迎り天卷
 ちまのくありて寅の一点に奄然として大定に入らり嗚呼あり哉主上上皇太后
 ハあさるるけをせいの懇に吊賻を送りたくりかくて尊体と納んよする五体す自生る
 ことして奥院に廟と立入定塔と号り會葬修者三万余人に及ふと云まこと古今
 例するる盛舉るりいと云

○三寶鳥 聖鳥のみ

御唐の林に鳥有り雄ハ仙法と云は嶋ハ僧と云ふに三寶鳥と云又全所に眼金色
 して足の爪青き鳥有り 大師入定の納涼房のありて来て若諸衆生此法教世人供
 知世間相住於業地堅住仙地と云ふなり 養猶如制底と云きまきバ大師ハ一生補処菩薩住仙地三昧道離於造作
 山僧日ごと餌と与ふる一山山更何まハ食ハ

○贈官 謚号の夏

朕もし仙の在世に何れ万里
とまじとせざりていづるべきと

曰ハ大江匡房卿曰くその勅説

信にござし夫高野ハ弘法大師即

身成佛のゆい伽藍淨刹三國無双

の靈山こそ里程もろく三十里これぞ

臨幸のゆいを憚る所ぞ申すバふく

歡感すく寛治二年二月二十日高野へ臨幸す

その行粧の善美を及せる人目とあろせりこきと始とて三夜御幸有りたる

又後宇多天皇御讓位の後正和二年七月御幸有りたる時ハくもふくも雨中

いとせしき山路御歩行有りせり

後醍醐天皇建武二年十二月



上皇曰ふ昔釈尊在世ハ天竺
の國王ミ多説法の坐つ

るり利益を

蒙し

と云

吉野の行在所といそに出すや高野へ臨御有り
又光嚴院法皇ハ正永七年いそ臨御有り奥院三日通夜のい満る曉に
高野山すいの若も覺るやとものりつれとすぬ夜むたたと咏りたり悉くく
大平記にええり

○御堂関白 宇治関白御参詣の事

御堂道長公ハ小野の僧正に御對面のとこ仰らまきまるとハ大師

今に正しく高野の庵にすまると世ハ澆季にかとろへ誰も

親り拜し者ふし哀むべしと曰ハ僧正こそるるやソハ

澆季にも信否によるべし一向信仰有りハ何々拜せざる

べきと曰ハ殿下さる旨と信じて治安三年十月廿二日

拜して登山すく祈念とせらしハ御廟の扉自らいらまて

尊容拜すれぬぬ悉く扶桑略記にええり

又宇治頼通公
は夢想のりりて



小野の成尊僧都のものと一書に記す所の高野山十方の賢聖常住の地三世の諸仙遊居の処と
 善神番々をこきとせり家尊説法の地弥勒轉輪の山一丈この山にのる輩ハ三途の加念たりら三會下生のつぎ
 に何ふと夢想の体希有之この定する記文アリバハしいたまふべしと有りき高野僧都のまに高野の浄土の由来
 とすれどもせらさしハ大之感心せらさし乃ち永承三年参詣し高野の夢想のつぎ高野の浄土の由来
 なるに御座の戸まのつらひらけ尊容拜せられせり高野の御感信肝に銘じ歡喜の泪せきりんせせりしと
 へやうく代々の帝も臨幸すり殿下大臣も参詣のつぎ高野の御感信肝に銘じ歡喜の泪せきりんせせりしと
 上に出づ
 と得んや

○弘法大師願日 △エー日 ○本々日	正月 △五日 ○十六日	二月 △七日 ○八日	三月 △四日 ○十五日	四月 △五日 ○十五日	五月 △十一日 ○十五日	六月 △三日 ○十一日	閏月 △前月の月全ト尤三年三 月参入人詰願成就してその 功德廣大するべし
七月 △十五日 ○十六日	八月 △十日 ○十八日	九月 △八日 ○十一日	十月 △十五日 ○十九日	十一月 △六日 ○九日	十二月 △十三日 ○十四日	正月 △三日 ○十一日	

明治二十四年八月一日 印刷
 全 年八月二日 出版

定價拾錢



編纂人 武川丑之助
 大坂市東区南久太郎町四百〇一番屋敷
 發行人 松本善助
 全市東区心齋橋通南久太郎町百〇一番屋敷
 印刷人 大館美通
 全市東区上本町二丁目五十四番屋敷

